

HK Pops にみる香港人のアイデンティティ

【はじめに 香港人アイデンティティ確立のプロセスを映し出す鏡として】

文化砂漠。

かつて香港を評する時、常に付いて回った言葉である。文学に限らず、音楽、映画に至るまで、香港以外の地域以外でも知られていたのは、せいぜいがブルース・リー（60年代）くらいであり、ホンコンにはカンフー映画、何があるのだ？という問いは、あながち的はずれとは言えなかったのである。安っぽい造花がホンコンフラワーと呼ばれた時代のことである。出来の悪いニセモノの街、それがホンコンに対する評価であった。

従って、70年代までの香港の人々にはアイデンティティは存在しない。彼らにとって、安住の地を求めて得られない人々が漂泊生活に疲れて立ち止まる仮初めの停泊地であり、例えば、台湾における民主化運動のなかで政治的に亡命してたどり着く者や、文化大革命の嵐から逃れてきた者達がたどり着く場所であった。彼らにとって、香港は常に異郷の地であったし、事実多くの人々は本当の安息の地を求めて、香港を去っていったのだ。この時期の香港の音楽には当然ながら何ら独自性は見いだされず、広東語文化圏のなかに内包される形で、人々の娯楽は広東民謡が中心であった。例えば、「新難兄難弟」（93年制作、月夜の願い）で描かれる「春風街」（Memory Lane）はまさしく60年代の香港の雰囲気をよく伝えているし、「新不了情」に登場する田舎広東民謡楽団一家は70年代の香港なら珍しくない存在だったろう。アニタ・ユン扮する少女も楽団の仕事だけでなく、テレサ・テンの海賊版のテープ作りもしていたように、80年代に入っても、外国曲のカバーはおろか、海賊版も平気で正規版と並んで露天に並べられていた時代であった。従って、今日の香港ポップスの隆盛はひいき目に見積もっても70年代はじめから、オリジナル曲で、歌手ごとに独自性が十分認められるようになったのは、70年代末であろう。別表の通り、78年には香港電台（ラジオ）によって、「第1回十大中文金曲」が選ばれ、第2位にはテレサ・テンの「小村之恋」（広東語）が選ばれている。当時活躍していた代表的な歌手としては、ほかにサミュエル・ホイ（許冠傑、Mr. Booなどの映画音楽でも知られる）、アラン・タム（譚詠麟）などがあり、テレサ・テンは別格としても、多くが香港で活躍する歌手達であり、曲がりなりにオリジナルの曲を歌っている点で、香港の独自性を獲得しつつあったといってもよいだろう。

< 広東語ポップスの台頭 >

50年代以降78年までの音楽状況は、黄志華によれば大きく3つに分けられる。1) 粵劇 2) 北京語流行歌 3) 欧米音楽である。このうち、圧倒的な人気を博していたのが、1)であり、2)は大陸からの移民から支持されていた。3)については64年のビートルズ公演の影響が指摘されるものの、当時は一部の若者だけのものだった。

* 林穗紅編『チャイニーズポップスのすべて』（音楽之友社）1997

ここから分かることは何かといえば、「広東語によるポップスは存在しなかった」ということである。粵

小村之恋

弯弯的小河 青青的山岗
意味着小村庄
蓝蓝的天空 阵阵地花香
怎不叫人为你向往
啊 问故乡
问故乡变了什么模样
我时常时常地想念你
我愿意愿意回到你身旁
回到你身旁
美丽的村庄 美丽的风光
你常出现我的梦乡
白：在梦里我又回到了我难忘的故乡
那弯弯的小河 阵阵的花香
使我向往 使我难忘
难忘的小河 难忘的山岗
难忘的小村庄
在那里歌唱 在那里成长
怎不叫人为你向往

劇を連想させる古くさい言葉として広東語は当初敬遠され、むしろポップスを好む若者は進んで英語のカバー曲を歌い、次いで北京語の流行歌を受け入れた。この状況に異変が起きたのが70年代後半であろう。徐々に香港で生まれ育った第2世代が現れ、彼らは最も身近な言葉による歌を求めた。「第1回十大中文金曲」が創設されたのも、自分たちの言葉で歌いたいという意識の萌芽と無関係ではない。英語、北京語をそのまま歌うのではなく、広東語にアレンジしてから歌うわけであるから、鵜呑みの状態から、消化吸收の時代へと進んできたのが70年代と評価できるだろう。

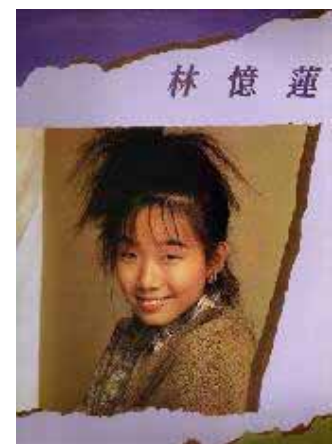
とはいえ、もう一度「小村之恋」の歌詞を見直して欲しい。当時ヒットした歌の全てが同一の内容ではなかったにせよ、望郷の思いを歌い上げる歌がヒットした理由を改めて問い直すまでもないだろう。恐らく殆ど同じ歌詞の北京語版が台湾で流行していたであろうとも想像されるが、これはとりもなおさず、台湾の外省人とともに「流亡中の中国人」という意識が捨てきれなかったことを示している。当然、「香港人」という意識を獲得するまでには至っていなかったのであろう。こうした意識が完全に姿を消すのは80年代以降、香港生まれの香港人が多数を占める時期まで続くことになる。

<カバー曲全盛の時代とサンディ・ラムの登場>

80年代はヒット曲にはオリジナル曲とカバー曲が混在する時代である。82年には大塚博堂「春は横顔」が「星星问」(徐小凤)として、五輪真弓「恋人よ」が「雨丝·情愁」(谭咏麟)として、83年に至っては、第1位、第2位はそれぞれ山口百恵「赤の疑惑」のカバー(梅艳芳「赤的疑惑」)、因幡晃「わかって下さい」(谭咏麟「迟来的春天」)と日本の歌謡曲カバー全盛の時代が続く。この頃、どれほどの曲がカバーされたのか、正確な資料は残念ながら存在しないが、毎年のようにヒット曲だけでも十数曲が様々な形でカバーされていたことは間違いのないだろう。今なら著作権法違反であろうが、当時は完全な無法状態であったといってよい。このころは欧米のヒット曲は極めて少数であった。〔Winners(温拿)も人気を博していたのであるから、その影響力を過小に評価することは出来ないだろうが〕。

この日本歌謡曲全盛時代の終わりにサンディ・ラム(林憶蓮)は登場し、本格的な香港ポップスの黄金時代への橋渡しをすることになる。巧みなイメージ戦略は、色々な意味で後の王菲などのアーティストと呼ばれるにふさわしい次世代の登場を予告するものであり、今日の低迷は90年代の香港人の苦悩を代弁するものといえる。まずは簡単に彼女の略歴を紹介しておこう。

サンディ・ラム(林憶蓮)は1966年生まれ、出生後まもなく上海より香港に移住した。伝統的な定義に従えば父祖の出身地によって決まるから、彼女は上海人と言っても差し支えない出自であり、家庭内の言語は上海語であったようだ。父母ともに京劇の二胡奏者(と歌手)で生計を立てていたが、決して豊かではなかっただろうと推測される。高校時代からラジオ局のアルバイトでDJをつとめたのは、音楽好きが高じてと伝えられるが、要するに少しでも早く食わねばならない(彼女は長女)という事情があったからである。時代は80年半ば、香港経済もかつてのホンコンフラワーに依存した家内制工業から脱却し、急速な近代化の波に洗われていた。前にも触れたように若者の間でもはやされたのは、古ぼけた広東民謡ではなく、アメリカンポップス、そして日本語歌謡曲であった。そんな曲を流しながら、洒落れたコメントをつけるラジオ局DJ、それが彼女であった。DJとして人気を博した彼女に目を付けたレコード会社によってサンディ・ラムはレコー



デビューを果たす。85年のことである。初めてのアルバム名は、ずばり「林憶蓮」であった。続くアルバム「放縱」(86)「憶蓮」(87)と順調にアルバムを出し続けるが、中身は松田聖子などの日本歌謡曲のカバーであり、オリジナルは少なかった。前述の通り、当時としては当たり前のごとで、彼女も例外ではなかっただけである。当時の香港は「文化砂漠」であり、独自の歌を作るだけの力量のある作曲家は存在したとしても極めて少数であった。となれば、海外の曲をコピーしてきて、中国語の歌詞をつけるしかなかったのである。このため、歌詞そのものもメロディに合わせた歌詞が存在すればよく、換骨奪胎？とも言うべき歌詞が多かった。特に日本語からの翻訳の場合、日本語を解すものがいなかったという事情も介在しているであろうが、好意的に解釈するならば、外来の音楽技法を積極的に吸収していた時期ともいえる。

【転機】

一般に日本語歌謡のカバー歌手サンディ・ラムが変貌を遂げる契機となったのは、「灰色」(87)と言われる。自らプロデュースも担当して作ったアルバムのタイトル曲「灰色」は同年の中文十大金曲にも選ばれ、スターとしての地位を獲得する。この曲は当時としては珍しく欧米の曲をカバーしたもので、これまた当時としては珍しくテクノポップ風のアレンジになっている(元歌不明のため、どこからの影響下は分からず)。また、アルバムは依然としてカバー曲として小林麻美「HUMAN WOMAN」のカバーらしき曲が入っているものの、日本歌謡曲は一曲のみであり、タツ・ラウ(劉以達、当時は達明一派)の曲も一曲入るなど、実験的な試みが窺われるものとなっている。もはや日本歌謡曲カバー専門の歌手から脱却を遂げつつあったと言えよう。続く「READY」(88)では更に一歩進めて、曲作りを当時売り出し中のアンソニー・ロン(倫永亮)に依頼、ジャケットの雰囲気も一新した。「そこそこかわいくて歌が上手」というイメージからの脱皮である。歌がうまくても、とびきりうまいわけではなかった(例えば当時のアニタ・ムイなどと比べようと言うのが間違いである)容顔で売り出そうとすれば、「日本人顔」が仇となった。

<p>灰色 曲：T Fernando/L Fernando/W Brown 词：林振强</p> <p>灰色 HAHAHA</p> <p>再也不想诈不知 谁人近日与你干着快乐事 你我之间存着黑影子</p> <p>假使再拖极为无意义 让我(尽)变历史故事 不想再继续痴恋爱的骗子 但暗里我却掂挂那曾汹涌的爱 那次遇上才知生命精彩 当天内心激出缤纷色彩</p> <p>但现在心中只有灰色 HAHAHA 碎的追忆 HAHAHA 冰冷空隙 心中绞痛就如长刀冲击 HAHAHA (恨极没法撞穿 心中灰色)</p> <p>我会穿起冷灰衣 行离旧地免你隔着我办事 你我之间由昨天终止</p>



彼女の立場からすれば、このイメージチェンジは、その弱点をうまくカバーできる新鮮なキャラクターづくりに主眼があったといえる。一言で言えば「洗練」というイメージであろうか。それは当時の香港社会に生まれつつあった、高学歴で男性に伍して働く独身女性の存在を代弁する「シティー・ガール」である。これまでは家計の助けに働く女性はいても、独立して生計を営みうるような女性は存在しなかった。そうした女性を受け入れる企業もなければ、経済的なゆとりもなかった。だが、八十年代後半になると、香港では急速に女性の進出が明瞭になり、いったん進出が進むと、かえって従来「お茶くみ」社員が存在しなかった企業社会では、女性が男性同様働くのは自明のこととなった。この状況を反映して、都会における孤独、そして孤独を癒してくれる恋愛を歌ったところ



に、この時期のサンディ・ラムの成功があるといえる。ジャケット写真は海外で撮影したものを用い、一枚目の「都市觸覚」には小さい文字で次のように記されている。

The urban female of the 80's is independent, but of the same time vulnerable strong-minded but feminine sensible but emotional. City Rhythm characterizes this special calibre of today's woman by exploring the complexity of her feelings.

the ways she escapes from solitude the sweetness and the bitterness of her romance. and the continuous struggle with emotions. 独立した女性ではあっても、同時に感じやすく傷つきやすい心。そんな都会における孤独を描くのが都市觸覚であるという。むろん、彼女の歌通りの恋愛があったかどうかは少々疑問だが、憧れも含めて当時の香港では絶大な支持を得た。その意図が最もよく現れた作品として、上げられるのが「都市觸覚」シリーズで、第1作に続き、「都市觸覚 Part II - 逃離鋼筋森林」「都市觸覚 Part III - Faces And Places-」と、いずれもジャケット、歌詞には都会の雰囲気や漂わせたものとなっている。このなかから、89年には「依然」が、90年には「前塵」がヒットする。それらに続く「愛上一個不回家的人」はタイトルこそ違え、いわば北京語バージョンであり、歌詞やジャケットの作りは共通している。この一連のアルバムはいずれも香港だけでなく台湾、中国でも空前のヒットとなり、数多くの海賊版を生み出した。当時人気絶頂を極めた彼女のライブは「憶蓮意亂情迷 1991LIVE」で聞くことができるが、この初のソロコンサートで5万6千人を動員している（香港の人口を考えれば驚異的といつて良い）。

サンディ・ラムの88年以降の成功は、巧みなイメージづくりに負うところが大きいのは間違いない。当時の香港に生まれつつあった新しいホワイトカラー層（特に女性）を意識したイメージ戦略は十分な成功を収めたといえるだろう。アルバムに収められた曲には数多くの欧米のヒット曲が取り込まれているが、アレンジを変え、歌詞を変えて、全体のイメージにはほとんどカバー曲という印象を与えないほどの仕上がりにある。例えば「前塵」のようなオリジナル曲であっても、十分成功を収めることが可能であり、また、その方がアルバムのトータルイメージによって完成度の高いものが制作できるという当たり前の事実を香港で知らしめた意味は大きい。

前尘

曲：Dick Lee 词：周礼茂

悄悄望这小马路 从前情怀再度
看星看海看夜涛 踏过我踏过的路
来不及问候你可好 来不及问候早给你拥抱
甜酸苦心往返 泪不知之间已流露

曾经的一个你 曾经的一个我 曾经的相处过
回忆中的你笑 回忆中的你说 回忆中爱哭的我
当天笑面 重新探望我
难得今天你 难得今天你记得起我
(如果一天你 如果一天你怀念最初)

轻轻放松的脚步 忘怀城市速度

说风说花说月儿 未记却又记归路
来不及羡慕你多好 来不及羡慕怎么你不老
如他朝许可 愿一起追忆往时路

曾经的一个你 曾经的一个我 曾经的相处过
(可否想起我)
回忆中的你笑 回忆中的我听 回忆中我总出错
(愿某天...)
曾经的一个你 曾经的一个我 曾经的相处过
(又再可...)
回忆中的你笑 回忆中的你说 回忆中爱哭的我
(可伴你 一起的过)

だが、その成功の頂点に立った年、88年は香港返還問題が社会的にもクローズアップされた年である。翌89年には香港特別区基本法がおおむね決定を見た直後天安門事件が起きた。すでに天安門事件による社会不安によって、香港社会は束の間の繁栄が極めて危うい浮島にしかすぎないことに気づいてしまった。第2世代の彼らにとって、香港は生まれ故郷であり、永住の地であったが、その土地の命運は中国に握られていることが明白になったのである。嫌でも改めて中国人である自分のアイデンティティのあり方を問い直さざるを得なかった。この地を捨て、海外に移住するか、中国人として生きるか。ディック・リーをプロデューサーとして、「夢了、瘋了、倦了」(91)を制作したのは、そうした動機に基づいていると考えて良いだろう。

【中国人のアイデンティティ、そして迷走】

都市シリーズでの成功をベースとしつつも、新たな要素を巧みに取り入れていった時期が1991-1995である。「野花」「回来愛的身邊」「不如重新開始」は今でも一聴の価値を失っていない。「野花」は全曲花をテーマとしたディック・リーによるプロデュースアルバム。名作「夜来香」をモチーフに歌った曲などが盛り込まれ、彼女のアルバムでは最も中国的な一枚となった。しかし、この路線も長続きさせることは難しく、「回来～」「不如～」では明確なモチーフを打ち出せなかった。ただ、ジョナサン・リー(李宗盛)などの優れたメロディメーカーの参加もえた個々の曲を聴いてゆくと、仕上がりは決して悪くない。やはりサンディ・ラムの絶頂期が続いていたという印象である。しかし、この頃、すでに壁は見えていたと言って良いのではないかと。自分の持つイメージを最大の売り物にして人気を獲得した彼女にとって、新たなイメージへの脱皮がはかれなければ、飽きられてしまう。いや、むしろ時代において行かれるという危機感がかなり強かったのではないかと推測される。

【日本進出】

壁を突き破る彼女なりの解決方法が、日本進出であった。93年10月、日本で二度目のソロコンサートを開くと、翌94年3月にはシングル「どうしてよ」をリリース、続いてアルバム「Simple」を発表した。翌95年には「Open Up」も制作している(半分英語、半分日本語)。ところが、このシングルもアルバムも散々な評判で、結局一万枚にも届かなかったと言われる。結局、香港での活動を犠牲にして、日本での宣伝活動に全てをつぎ込んだものの、ほとんど報われることはなかったと言って良いだろう。最大の失敗の原因は香港で展開してきた彼女のイメージづくりが全く生かされない選曲であり、宣伝活動であったことにつける。サンディ・ラムを知るものが聞いても、誰の曲かわからぬようでは売れるはずもなかった。香港社会が天安門事件を経験し、中国に自らの人生を託さねばならぬ不安を抱えているなかで、サンディ・ラムの都会派路線は色あせ、これまで築き上げてきた遺産を食いつぶした一年といえる。日本進出を断念した彼女は、台湾に照準を合わせ、ロックレコードへと移籍し、95年にアルバム「Love, Sandy」を制作する。同時にジョナサン・リー(李宗盛)にプロデュースを一任し、台湾での大成功をおさめる。96年、

「感覺完美」(広東語)も発表するが、香港むけに発表されたアルバムは台湾ほどの成功を収めることはなかった。続く「Sandy I Swear」はI Will Always Love You(ホイットニー・ヒューストン)のカバーなどを納めたものであり、「夜太黒」はオリジナルも含むものの、コンピレアルバムの域を出ないもので、97年「Wonderful World」に至っては、完全なカバーバージョンの世界。ここに至って、サンディ・ラムは一度死んだと言わねばならないだろう。

この後、サンディ・ラムは、ジョナサン・リーとの不倫騒動を経て、98年2月に、カナダ、バンクーバー(温哥華)で正式結婚、5月に出産を経験する。99年春「鏗鏘探劫」を発表している。ジョナサン・リーのメロディは相変わらず悪くないが、すでに現役は引いたと言って良いだろう。

参照した Home Page URL

サンディ・ラムのページ

<http://club.pep.ne.jp/~honhon/sandy/sandy.htm>

香港十大中文金曲

<http://cdlight.heha.net/top10/89.htm>